

コロナ禍での遠隔による 大学スポーツ授業の前後における 社会人基礎力の変化

前田 奎¹, 鈴木楓太¹, 束原文郎², 成相美紀¹, 吉中康子¹,
松木優也², 池川哲史²

¹京都先端科学大学教育開発センター

²京都先端科学大学健康医療学部

要 旨

＜目的＞本研究の目的は、コロナ禍における遠隔による大学スポーツ授業を通じて、受講者の「社会人基礎力」（経済産業省（METI）が提唱）がどのように変化するのかを記述し、その変化の背景を検討することである。本研究で対象としたSLS（スポーツ・ライフスキル）という大学スポーツ授業は、「社会人基礎力」の育成を目指したものである。＜方法＞新型コロナウイルスの影響を受け、第5回目（Pre：実技授業開始時点）および第15回目（Post：実技授業終了時点）において、受講生を対象に「社会人基礎力」の12の能力要素に関して、自己評価による調査を実施した。1598名の大学スポーツ授業の受講者のうち、Pre および Post の両方の調査に回答した188名（学年：1年生123名、2年生65名、性別：男子120名、女子65名、回答しない3名）が本研究の分析対象であった。各項目の値のPreとPostの比較には、Wilcoxon 符号付順位和検定を用いた。＜結果および考察＞本研究の主な結果は次の通りである：12の構成要素のうち、「働きかけ力」（ $z = -2.26, p < 0.05$ ）、「課題発見力」（ $z = -2.48, p < 0.05$ ）、「計画力」（ $z = -2.62, p < 0.01$ ）、「創造力」（ $z = -3.99, p < 0.01$ ）、「発信力」（ $z = -3.95, p < 0.01$ ）および「傾聴力」（ $z = -2.49, p < 0.05$ ）について、授業後が授業前よりも有意に高値を示した。また、「社会人基礎力」を構成する3つの力をみると、「考え抜く力（シンキング）」（ $z = -3.85, p < 0.01$ ）および「チームで働く力（チームワーク）」（ $z = -2.25, p < 0.05$ ）について、授業後が授業前よりも有意に高値を示した。これらのことから、「働きかけ力」、「課題発見力」、「計画力」、「創造力」、「発信力」および「傾聴力」は遠隔による大学スポーツ授業でも育成可能であることが示唆された。本研究の結果は、コロナ禍あるいはアフターコロナにおける効果的な遠隔による大学スポーツ授業の一助となる。一方、対面授業を実施することによって育成できる能力要素が多く存在する可能性もある。したがって、今後はそれらの能力を育成するための授業についても研究を進める必要がある。

キーワード

ライフスキル, 考え抜く力, 働きかけ力, 発信力, 傾聴力

責任著者：前田 奎 Email: maeda.kei@kuas.ac.jp

緒 言

近年、「人生100年時代」の到来を見越して、刻々と変化する社会の流れに対応しながら、ライフステージの各段階で活躍し続ける力が求められている。経済産業省は、2006年に「職場や地域社会で多様な人々とともに仕事をする上で必要な能力」として、「前に踏み出す力（アクション）」、「考え抜く力（シンキング）」、「チームで働く

力（チームワーク）」を掲げている。さらに、それらを12の能力要素（前に踏み出す力：主体性、働きかけ力、実行力；考え抜く力：課題発見力、計画力、創造力；チームで働く力：発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力）に細分化した「社会人基礎力」を提言している。この「社会人基礎力」は、企業の人事評価、特に新卒採用現場で重要視されており、

「社会人基礎力」を育成する場として大学教育が果たす役割の重要性が指摘されている（経済産業省，2018）。

こうした社会的な要請に呼応して，大学スポーツ授業^{（注1）}における受講者の「社会人基礎力」について検討した研究が蓄積されつつある（青木ほか，2012；引原ほか，2016；石道ほか，2016；金田・引原，2018）。石道ほか（2015）は，選択科目の大学スポーツ授業の受講者と非受講者の社会人基礎力を比較している。その結果，大学スポーツ授業の受講者は，「前に踏み出す力（アクション）」が非受講者より有意に高かったことが明らかとなっている。また，引原ほか（2016）によれば，大学スポーツ授業の中でもトレーニング（ウエイトトレーニング，持久的トレーニング）と比較してネット型スポーツにおいて，「主体性」「課題発見力」等5つの能力要素が有意に向上したという。このように，大学スポーツ授業は，大学生の「社会人基礎力」の育成に貢献することが示されている。

しかしながら，石道ほか（2016）は，「大学教育や研究成果の社会還元という観点から考えた場合，社会人基礎力育成に着目した研究は，より汎用性が高く有意義なものである」と述べた上で，「既存の大学スポーツ授業が社会人基礎力の育成に及ぼす影響については未だに不明瞭であり，効果的な社会人基礎力の向上につながる教育プログラムに関する報告もない」と指摘している。つまり，今後も効果的な「社会人基礎力」の向上を目指した教育プログラムに関する実践報告の蓄積が，社会的にも学術的にも期待されているといえよう。

著者が所属する京都先端科学大学においては，2019年度より従来の教養スポーツ実技を「Sport Life Skill（SLS：スポーツ・ライフスキル）」（以下，「SLS」とする）と改めて，健康医療学部看護学科および言語聴覚学科を除く全5学部・11学科で必修科目となった（1，2年次，計4単位）。京都先端科学大学の「第1次中期経営計画」では，その目的を「社会で活躍するために必要な基本的能力であるコミュニケーション能力，多様性の受容力，リーダーシップ，チームワークといった人間力を身に付けるために，1，2年次においてはスポーツ実技を中心としたプログラムを必修化し，スポーツを通じて人間性を磨く機会を提供する」と説明している。このように，京都先端科学大学のSLSは，社会で活躍するために必要な基本的能力の育成を主な目的としており，シラバスに記載された到達目標や，個々の授業における評価の基準にも反映されている。すなわち，京都先端科学大学における授業実践について，受講生の「社会人基礎力」を指標として，その変化を報告することは，「社会人基礎力」の向上を目指した教育プログラムに関する実践報告の蓄

積に貢献できると考えられる。

しかし，2020年3月以降新型コロナウイルスの感染が急速に拡大し，シラバスに記載した授業展開は変更を余儀なくされた。2020年4月には政府から緊急事態宣言が発出され，教育機関においては休校あるいは遠隔による対応をせざるを得ない状況となった。緊急事態宣言は5月末に一旦解除されたものの，その後も対面での実技授業（以下，「対面授業」とする）の実施が継続して困難な状況となり，SLSにおいても春学期の授業（4-7月）は全て遠隔による大学スポーツ授業を実施することとなった（以下，遠隔による授業を「遠隔授業」とする）。

こうした経緯によって，2020年度春学期のSLSは全面遠隔授業となったものの，シラバスに掲げた「社会で活躍するために必要な基本的能力の向上を目指す」教育目標の達成に向けて，授業が展開された。これまで，遠隔による大学スポーツ授業あるいはスポーツ実践について報告した研究として，通信制大学を対象としたもの（井上・川上，2017）やテニスのオンラインレッスンを対象としたもの（石原・高橋，2010）がある。しかしながら，教育機関における遠隔による大学スポーツ授業を通じた「社会人基礎力」あるいはライフスキルなどの変化について報告した研究は見当たらない。国内で最初の感染が確認されてから1年以上が経過した2021年9月現在，新型コロナウイルスの感染拡大収束の目途は立っておらず，収束後も実技科目を含む大学の授業の一部が遠隔で実施される可能性が大いにあることを考慮すると，遠隔による大学スポーツ授業の教育効果に関する実践報告を蓄積することは大きな意義を持つといえよう。Society 5.0時代の大学教育として，効果的な社会人基礎力の向上につながる遠隔授業の教育プログラムの開発にも積極的に取り組むことで，今後に役立つ知見を提供することができであろう。

以上のことから，本研究は，コロナ禍における遠隔による大学スポーツ授業として実施された2020年度春学期のSLSの前後で，受講者の「社会人基礎力」がどのように変化するかを記述し，その変化の背景を検討することを目的とした。

方 法

1. 調査対象者

本研究では，京都先端科学大学に所属し，2020年の春学期（4-7月）にSLSを履修した学生（1598名）を対象に，アンケートを実施した。実技授業開始時点の調査（授業前）では579名，授業終了時点の調査（授業後）では306名から回答が得られた。そのうち，授業前と授業後の計2回のアンケートに回答した188名を分析対象者とし

表1-1 2020年春学期の授業内容（種目共通実施内容）

週	遠隔授業の形態	テーマ	種 目 共 通 実 施 内 容
1	オンデマンド型	自身の生活習慣および身体活動の状態の把握	・これまでの生活および身体活動の振り返りと評価
2	オンデマンド型	身体活動の重要性	・身体不活動のデメリットとスポーツ・運動や生活活動を活発にすることの意義についての理解
3	オンデマンド型	セルフプレゼンテーション	・スポーツおよび運動の経験および自身のアピールポイントを他者に伝える
4	オンデマンド型	オリエンテーション	・授業の進め方、注意事項、種目選択などに関する説明
5	オンデマンド型	姿勢・平衡性	・基礎知識、トレーニング方法の理解 姿勢のチェック、平衡性のテストおよびバランストレーニングの実践
6	オンデマンド型	柔軟性	・基礎知識、トレーニング方法の理解 柔軟性のチェック、静的ストレッチを実践
7	オンデマンド型	筋力・筋持久力① 体幹・上肢	・基礎知識、トレーニング方法の理解 筋力トレーニングの理論、様々な腕立て伏せの実践
8	オンデマンド型	筋力・筋持久力② 体幹・下肢	・基礎知識、トレーニング方法の理解 下肢のトレーニングの効果、スクワットおよびジャンプトレーニングの実践
9	オンデマンド型	全身持久力	・基礎知識、トレーニング方法の理解 持久力の定義と必要性、持久力のチェックおよび持久的トレーニングの実践
10	オンデマンド型	敏捷性・調整力	・基礎知識、トレーニング方法の理解 敏捷性および調整力の定義と必要性、様々なスクエアステップの実践
11-13	オンデマンド型	授業形態やテーマ、実施内容は表1-2参照	
14	同時双方向型 (グループトーク)	種目別課題④	・3-4名のグループに分けた種目別のテーマに関するディスカッションと発表
15	オンデマンド型	種目別課題⑤	・春学期学修内容の振り返り

表 1－2 2020年春学期の授業内容（種目別実施内容）

週	遠隔授業の形態	テーマ	種 目 別 実 施 内 容						
			クリケット	サッカー	ソフトボール	バドミントン	テニス	フィットネス	バスケットボール
11	同時双方向型 オンデマンド型	種目別オリエンテーション	・第11週以降の授業の進め方と課題についての説明（約20分）						
		種目別課題①	・身近な材料を用いたバットとボール等の作成 ・ボールハンドリング	・日本サッカーの歴史 ・サッカーに適したストレッチの理解と実践	・身近な材料を用いたグローブとボールの作成 ・セルフキャッチボール	・身近な材料を用いてラケットとシャトルコック代用球の作成	・種目特性とルールの理解 ・呼吸について考える	・身近な材料を用いたボールの作成 ・ボールハンドリング①	
12	オンデマンド型	種目別課題②	・クリケットの動画視聴による基礎技術とルールの理解 ・ボールキャッチとボウリング練習 ・フォームの学習、動画撮影、セルフフィードバック	・サッカーに適したストレッチの実践 ・ボールフィーリング	・距離や方向をコントロールするボール投げの実践 ・セルフトスバツティングの実践	・バドミントンの動画視聴と基礎技術やルールの理解 ・ラケットワーク基礎技能練習	・用具についての理解 ・身近な材料を用いたラケットとボールの作成 ・ラケットでボールをつく運動の実践	・自身の呼吸法を意識化 ・鼻呼吸の実践 ・腹部を使った呼吸の実践	・ボールハンドリング② ・セットシュートのフォーム習得①
		種目別課題③	・基礎技術の復習 ・バッティングの練習 ・フォームの学習、動画撮影、セルフフィードバック	・サッカーに適したストレッチの実践 ・リフティング、ドリブル	・ウインドミル投法の実践	・基礎技術の復習 ・サービスの練習 ・試合の進め方やポイントの取り方などルールの理解	・ボールの距離や方向をコントロールする運動の実践	・完全呼吸法の実践 ・身体の動きの意識化（左右非対称な動き）	・ボールハンドリング③ ・セットシュートのフォーム習得②

た(学年：1年生123名，2年生65名，性別：男子120名，女子65名，回答しない3名).

SLS は、8 名の常勤教員が担当しており、2020 年春学期はクリケット、サッカー、ソフトボール、バドミントン、テニス、フィットネス、バスケットボールの中から、学生自身が希望する種目を選択することが可能であった。しかし、各種目には定員が設けられているため、必ずしも希望種目を履修できるわけではない。2020 年春学期の授業内容の概略は、表 1-1 および 1-2 に示した通りである。なお、2020 年度春学期の授業プログラムは、京都先端科学大学における既存の授業プログラムではなく、遠隔授業のために SLS の授業担当教員の専門性を生かした教材および各種目担当教員を中心に考案された教材の配信という授業形態で展開されたものである。なお、各教員は、例えば A 教員はソフトボールとサッカー、B 教

員はテニスとフィットネスとバスケットボールというように複数の種目を担当している。

各クラスの履修者数は、30～45名程度であり、第5回目から第10回目にかけては、種目に関わらず共通の課題として、自宅で実施できるトレーニングやエクササイズ（種目共通課題）を実施した。第11回目から第15回目にかけては、種目別に異なる課題を設定し、代用スポーツ用具の作成および作成した用具を使用した基礎的なトレーニングなど（種目別課題）を実施した。第14回目には、各種目に応じたテーマについて Web 会議ツール（Zoom, Zoom Video Communications Inc.）を用いた同時双方向型授業によるグループトーク（ディスカッションならびにプレゼンテーション）を行った。課題提出期限は、自粛期間の定期的な運動を促すために、種目共通課題は授業当日中、種目別課題は授業翌日までとした。提出内容

は、実際に運動を実施した感想や気づき、実施中の写真などであった。

2. 調査の手続き

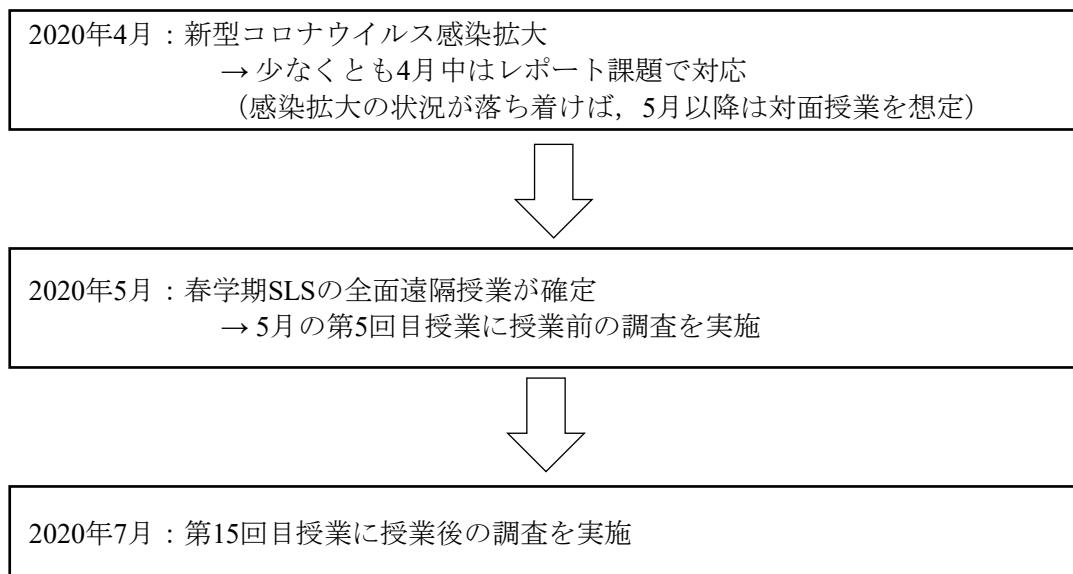
本研究における調査の手続きの流れを図1に示した。2020年4月時点において、新型コロナウイルスの感染拡大により、対面授業の実施が少なくとも5月以降まで困難となった。そのため、4月の1ヶ月間はレポート課題にて対応し、5月から授業を実施することを想定していた。しかしながら、京都先端科学大学において、5月以降（春学期は全て）対面授業の実施ができないことが決定し、5月の第5回目授業からも、遠隔授業を継続することとなった。そのため、第5回目授業を調査対象授業の開始時点として、調査を進めた。調査の実施にあたって、内容や結果の公表についての説明文書を京都先端科学大学の学内専用サイトにて配布した。その後、研究参加に同意した者のみ、Google フォームによるアンケートを通して回答を得た。なお、本調査への参加に際し、謝金等の報酬は一切なく、調査への参加の有無は成績には一切関係ないことについての説明も行った。本研究は京都先端科学大学の研究倫理審査委員会による承認を受けて実施した（20-501）。

3. 調査内容

本研究では、SLS 履修者に対して、社会人基礎力を構成する12の要素について、アンケートを実施した（アンケートの内容は資料として後に示した）。社会人基礎力の

尺度水準としては、6件法を用いたもの（糸嶺ほか、2015；北島ほか、2011）、5件法を用いたもの（片岡ほか、2015）、4件法を用いたもの（青木ほか、2012）、3件法を用いたもの（築山ほか、2008）など、様々な評価方法が採用されている。本研究では、0から10までの11段階評価による順序尺度法のNumerical Rating Scale（以下、「NRS」とする）を採用することとした。NRSは、大学スポーツ授業と「社会人基礎力」についての先行研究（石道ほか、2015、2016）で採用されている視覚的評価スケール（Visual Analog Scale、以下「VAS」とする）と同様に、臨床の場における痛みの評価で使用されている評価方法である（日本緩和医療学会、online）。本研究を実施するにあたって、大学スポーツ授業と「社会人基礎力」に関する先行研究（石道ほか、2015、2016）を参考にVASの採用を検討したが、Google フォームにおいてVASを再現することが困難であった。そこで、0から10までの11段階評価のNRSであれば、得られる値がVASに近いと考えた。また、質問項目が類似した先行研究（石道ほか、2015、2016）との結果を比較する際に、より近いものを使用することが妥当と判断したため、NRSの採用を決定した。

アンケートを実施するにあたり使用した教示文は以下の通りである：以下、「社会人基礎力」に関して、皆さんの現時点でのレベルを、自己評価を行っていただきます。それぞれの能力について、「全くない」と思うのであれば「0」を、「最高に高い」と思うのであれば「10」を選択して下さい。ひとつひとつの質問には深く考え込まず、



授業開始時点、授業終了時点ともに、京都先端科学大学学内専用サイトにて、本研究に関する説明および同意文書を配信し、同意した者のみ、Google フォームによるアンケートに回答。

図1 調査の流れ

第一印象を大切にありのままの様子をお答え下さい。

さらに、石道ほか (2016) に基づいて、「主体性」、「働きかけ力」、「実行力」の平均値を「前に踏み出す力（アクション）」、「課題発見力」、「計画力」、「創造力」の平均値を「考え抜く力（シンキング）」、「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」、「ストレスコントロール力」の平均値を「チームで働く力（チームワーク）」とし、それぞれ評価した。

4. 統計処理

得られた結果の基本統計量を算出した。全ての対象者における授業前と授業後の「社会人基礎力」の値の比較には、Wilcoxon 符号付順位検定を用いた。本研究では、 $p < 0.05$ を有意として判定した。全ての統計処理には、IBM SPSS Statistics 25.0 (IBM 社製) を用いた。

結 果

全ての対象者の授業前と授業後の「社会人基礎力」の変化について、表 2 に示した。「社会人基礎力」の各要素をみると、「働きかけ力」($z = -2.26$, $p < 0.05$)、「課題発見力」($z = -2.48$, $p < 0.05$)、「計画力」($z = -2.62$, $p < 0.01$)、「創造力」($z = -3.99$, $p < 0.01$)、「発信力」($z = -3.95$, $p < 0.01$) および「傾聴力」($z = -2.49$, $p < 0.05$) について、授業後が授業前よりも有意に高値を示した。その他の要素については、いずれも有意差は認められなかった。また、「社会人基礎力」を構成する 3 つの力をみると、「考え抜く力（シンキング）」($z = -3.85$, $p < 0.01$)

および「チームで働く力（チームワーク）」($z = -2.25$, $p < 0.05$) について、授業後が授業前よりも有意に高値を示した。「前に踏み出す力（アクション）」については、有意差は認められなかった。

考 察

本研究は、コロナ禍という前例のない状況下で、実施形態の大幅な変更を余儀なくされた授業ならびに調査の結果を報告したものである。大学における授業の遠隔化の流れは、コロナ禍収束後も継続することが想定されることから、遠隔授業の実践例を蓄積し、その問題点を含めて試行錯誤の過程を共有することは、広く一般的な意義を有していると考えられる。

京都先端科学大学では、2020年4月から6月10日まで、全ての授業が遠隔授業となったが、6月10日以降にスタートアップゼミ（1年生対象）^(注2)や専門ゼミ（4年生対象）などの一部の授業で対面授業が再開された（その他の授業については遠隔による実施が継続された）。アンケートの説明文には、「SLSを通した社会人基礎力の変化に関する調査」と題し、「SLSが社会人基礎力の育成を目指した授業であること」を記載していたため、対象者にはあくまでも「SLSの授業を通して社会人基礎力がどう変化したかを自己評価する」ということへの理解を促した上で調査を実施した。しかし、スタートアップゼミで対面授業が再開されたこと、対象者の日常生活に関する変数（アルバイトや課外活動など）を統制できていなかったことから、本研究の結果は「遠隔による大学スポー

表 2 授業の前（授業前）と後（授業後）における社会人基礎力の比較

	Pre				Post				z 値	Wilcoxon 検定 (Pre vs. Post)
	平均値 ± 標準偏差	パーセンタイル			平均値 ± 標準偏差	パーセンタイル				
		25	中央値	75		25	中央値	75		
主体性	6.37 ± 1.89	5.00	6.00	8.00	6.52 ± 1.76	5.00	7.00	8.00	-1.05	n. s.
働きかけ力	5.57 ± 2.33	4.00	6.00	7.00	5.88 ± 2.20	5.00	6.00	7.00	-2.26	*
実行力	6.34 ± 1.98	5.00	6.00	8.00	6.23 ± 2.03	5.00	6.00	8.00	-0.61	n. s.
前に踏み出す力 (アクション)	6.09 ± 1.80	5.00	6.17	7.33	6.21 ± 1.75	5.00	6.00	7.33	-1.23	n. s.
課題発見力	6.02 ± 1.88	5.00	6.00	7.00	6.38 ± 1.91	5.00	6.00	8.00	-2.48	*
計画力	5.65 ± 1.99	4.00	5.50	7.00	5.97 ± 2.05	5.00	6.00	7.00	-2.62	**
創造力	5.48 ± 2.14	4.00	5.00	7.00	6.05 ± 2.12	4.00	6.00	7.75	-3.99	**
考え抜く力 (シンキング)	5.72 ± 1.67	4.67	5.67	6.67	6.13 ± 1.72	5.00	6.00	7.33	-3.85	**
発信力	5.03 ± 2.19	3.00	5.00	6.00	5.59 ± 1.99	4.00	6.00	7.00	-3.95	**
傾聴力	7.25 ± 1.83	6.00	7.00	9.00	7.57 ± 1.70	6.00	8.00	9.00	-2.49	*
柔軟性	6.95 ± 1.92	5.25	7.00	8.00	7.06 ± 1.86	6.00	7.00	9.00	-0.97	n. s.
状況把握力	6.89 ± 1.77	6.00	7.00	8.00	6.99 ± 1.87	6.00	7.00	8.00	-0.7	n. s.
規律性	8.04 ± 1.61	7.00	8.00	9.00	7.85 ± 1.70	7.00	8.00	9.00	-1.64	n. s.
ストレスコントロール力	6.37 ± 2.30	5.00	6.00	8.00	6.28 ± 2.42	5.00	7.00	8.00	-0.58	n. s.
チームで働く力 (チームワーク)	6.76 ± 1.38	5.71	6.83	7.67	6.89 ± 1.39	6.00	7.00	8.00	-2.25	*

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

スポーツ授業が社会人基礎力に与えた“純粋な”影響」とは言い切れない。そのため、「遠隔による大学スポーツ授業前後における社会人基礎力の変化」について、その背景について考察を進める。

1. 遠隔による大学スポーツ授業前後における社会人基礎力の変化

本研究において、「考え抜く力（シンキング）」およびその3つの構成要素（「課題発見力」、「計画力」、「創造力」）は、授業前よりも授業後で有意に高値であった。石道ほか（2016）は、「社会人基礎力」の育成を意図した介入授業を実施し、介入群、非介入群および対照群（スポーツ実技系科目の受講者が誰一人として履修していない講義系科目の受講者）の3群間での「社会人基礎力」について比較している。その結果、介入群では「前に踏み出す力（アクション）」と「考え抜く力（シンキング）」が、非介入群では「考え抜く力（シンキング）」と「チームで働く力（チームワーク）」が、授業前に対して授業後で有意に高値を示したことが報告されている。本研究における「考え抜く力（シンキング）」の向上は、石道ほか（2016）の介入群および非介入群の結果と共通したものである。これらのことから、「考え抜く力（シンキング）」が、対面授業や遠隔授業といった授業形態による影響を受けず、また特別な介入をすることなく、大学スポーツ授業の前後で向上する能力であることが示唆された。また、SLSに限らず、京都先端科学大学で実施された遠隔授業の多くは、オンデマンド型の授業が中心であり、課題の提出に向けて現状を把握して準備をすること（課題発見力）、期限までに課題を提出するためのプロセスを計画すること（計画力）、課題に対してオリジナリティのある内容を考えること（創造力）などが求められる。このような背景から、「考え抜く力（シンキング）」は、オンデマンド型の遠隔授業での取り組みを通じて向上したものと考えられる。なお、引原ほか（2016）の報告におけるトレーニングの授業、金田・引原（2018）の報告におけるスポーツ科学（ゴルフ）の授業では、「考え抜く力（シンキング）」を構成する一部の能力要素が、授業の前後で変化しなかったことが示されている。その背景について、コミュニケーションをとる機会の少なさ（引原ほか、2016）や目標設定の明確さ（金田・引原、2018）が指摘されている。これらの結果は、本研究とは異なるものであったが、SLSにおいては、遠隔授業の各回での目標設定が明確であったこと、さらに全学的に遠隔授業が中心となり学生同士のコミュニケーションの機会が極めて少なくなったコロナ禍において、グループトーク^{（注3）}

を実施したことで、わずかとはいえコミュニケーションをとる機会を確保できたことが少なからず影響していると推察される。

グループトークの実施は、本研究における「働きかけ力」、「発信力」、「傾聴力」および「チームで働く力（チームワーク）」の変化と関連している可能性があるが、グループトークを実施したのは第14回授業のみであるため、履修者の「働きかけ力」、「発信力」、「傾聴力」および「チームで働く力（チームワーク）」を向上させた要因としては慎重に評価する必要がある。先述したように、京都先端科学大学では、2020年6月11日から1年生対象のスタートアップゼミにおいて対面授業が再開された。つまり、本研究の対象者のうち、1年生の123名はグループトーク以外でも、6月11日以降に同時双方向型の対面授業を受け、提示されたテーマについてのプレゼンテーション実施していたことになる。このことに加えて、SLSにおける1回のグループトークによって、社会人基礎力の能力要素が大きく向上するとは言い切れない。したがって、SLSにおけるグループトークのみが「働きかけ力」、「発信力」、「傾聴力」および「チームで働く力（チームワーク）」の向上に大きく貢献したとは言い難い。一方、グループトークを実施した当日の履修者の反応やレポート、授業評価アンケートにおいて、授業担当教員の主観的な印象ではあるが、グループトークに対する前向きな反応やコメントが多かったように見受けられた。したがって、グループディスカッションや数十人規模のクラスでのプレゼンテーションの機会が、SLSのみならず全ての授業を通じて希少であったと考えられる。

また、全ての学部学科に共通するかどうか明言はできないが、スタートアップゼミは比較的少人数でのプレゼンテーションであったのに対して、SLSのグループトークでは大人数に対するプレゼンテーションであった可能性が高い。有田（2021）は、オンライン会議システム（本研究と同様のツール）を用いたグループワークを実施した学生から、「非言語的なメッセージの重要性を感じた」、「相手の話を聴くためには聴く気持ちと態度が重要なことを学んだ」という反応があったことを示している。グループトークでは、冒頭の自己紹介やテーマに関する自分の考えを他者にわかりやすく伝え、聞き手がどのような人であっても積極的にディスカッションすることを働きかける必要がある。さらに、他者の意見を丁寧に聴く能力も必要となるため、「働きかけ力」、「発信力」および「傾聴力」の向上に影響を与えたと考えられる。「チームで働く力（チームワーク）」の向上については、これらの構成要素の向上による影響と推察される。これらのことに加えて、グループトーク後一週間ほどで授業後のアンケー

トを実施していることから、「働きかけ力」、「発信力」、「傾聴力」および「チームで働く力（チームワーク）」の向上に少なからず影響を与えた可能性はあるだろう。

本研究において、「前に踏み出す力（アクション）」と一部の構成要素（「主体性」、「実行力」）、「チームで働く力（チームワーク）」を構成する一部の要素（「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」、「ストレスコントロール力」）は、授業前と授業後との間で有意差は認められなかった。この結果は、実技授業の前後でこれらの能力要素が有意に向上することを示した先行研究（青木ほか, 2012；引原ほか, 2016；石道ほか, 2016；島本・石井, 2007）の結果とは異なるものであった。上記の先行研究が対象とした対面授業での大学スポーツ授業では、個別のスポーツ種目の技術の習得やチームプレーなどを通じた主体性や協調性の育成が期待できる（石道ほか, 2016）。そのため、本研究が対象とした春学期のSLSにおいて、受講生同士が技術習得のためのコミュニケーションをとる場面やチームとしてまとまってある目的に向かって協働する場面を十分には設定できなかったことによる影響は無視できないだろう。このことから、遠隔による大学スポーツ授業において、本研究で向上が認められなかった能力要素を向上させるためには、個別のスポーツ種目の技術の習得やチームプレーの機会を確保するような教育プログラムの開発が課題となるといえよう。

2. 本研究の限界と今後の課題

コロナ禍という前例のない特殊な状況は、本研究の結果に少なからず影響を与えたと考えられる。SLSでは、社会人基礎力の育成を目指して、学生同士がコミュニケーションを取って教え合うといったグループ学習の機会を多く確保することを計画していたが、遠隔による対応を余儀なくされ、学生同士がコミュニケーションを取り合う機会が減少した。そのため、相手の立場を理解する力である「柔軟性」、自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力である「状況把握力」、目的を設定し確実に実行する力である「実行力」の育成に貢献できなかった可能性がある。また、教員から授業時の決まりごとやスポーツのルールについて指導する場面も設定することができなかったため、社会のルールや人との約束を守る力である「規律性」の育成もできなかったと推察される。加えて、ほぼ全ての授業が遠隔になり、外出や課外活動の自粛が要請されたという状況は、学生にとっても初めての経験であると考えられる。身体活動が制限され、これまで以上にレポート課題が多く課されたことなどから、コロナ禍以前の学生と比べて、よりストレスフルな環境での生活を強いられた可能性も高く、ストレスの発生源に

対応する力である「ストレスコントロール力」や物事に進んで取り組む力である「主体性」の育成にも影響を与えただろう。他にも、本研究における「社会人基礎力」を構成する能力要素の説明や自己評価の方法は、先行研究（引原ほか, 2016；金田・引原, 2018）とは異なっており、このことが本研究における対象者の自己評価の結果と先行研究の結果との違いに影響を与えた可能性は否定できない。こうした本研究の限界を踏まえて、本研究の成果と今後の課題は次のように整理できよう。

まず、本研究では、遠隔による大学スポーツ授業の前後で「考え抜く力（シンキング）」およびその3つの構成要素が有意に向上した。これには、他の授業や課外活動、そして日常生活の様々な要因が作用していると考えられ、SLSはあくまでもそうした要因の一つであることに留意しなければならない。とはいえ、1, 2年生が履修可能な京都先端科学大学の春学期の授業は、6月中旬に対面授業が再開された1年生の「スタートアップゼミ」を除いて、ほぼ全ての授業が遠隔で行われたことから、上記の能力要素がSLSを含む遠隔授業という授業形態のもとで育成されたということはできるだろう。今後は、大学スポーツ授業が「社会人基礎力」の育成に与える影響について明らかにするために、例えば大学スポーツ授業以外の講義や課外活動、社会貢献活動やアルバイトといった変数も追加して調査するなど、大学スポーツ授業以外の要因も考慮した実践研究を行う必要がある。また、「社会人基礎力」の評価方法についても、本研究ではコロナ禍での実施であったことや設問数が増えることで対象者への負担が大きくなることを考慮して、先行研究とは異なる方法で実施したが、純粋に先行研究の結果と比較するには、評価方法を統一することも必要になるだろう。

一方で、評価方法の違いはあるものの、先行研究との比較から、遠隔による大学スポーツ授業だけで向上する「社会人基礎力」の能力要素は、対面での大学スポーツ授業の場合と比べて限られていることが示唆された。これは、「社会人基礎力」の向上を目指した大学スポーツ授業における対面授業の重要性を間接的に示すものである。通信制大学におけるスポーツ実技科目（ウェルネス）では、対面授業を実施することで、「他者とのコミュニケーションの大切さ」「運動の楽しさ」に気づき、「自分の体や運動能力に対する認識」を養える可能性があることが示唆されている（井上・川上, 2017）。学校教育法において、通信教育での対面授業が義務付けられていることを踏まえても、対面授業という授業形式が受講者の学習成果に対してポジティブな影響を与えることがわかる。したがって、仮に今後大学教育の遠隔化が進んだとしても、スポーツ実技科目に関しては全ての授業を遠隔にするの

ではなく、可能な範囲で対面授業を実施することが、学習効果を高めるためには重要であると考えられる。

さらに、本研究では対照群を設定、すなわち SLS を受講していない対象者を確保することができていない点にも留意する必要がある。SLS は、健康医療学部看護学科および言語聴覚学科を除く全 6 学部・11 学科で必修科目であり、看護学科および言語聴覚学科においては選択科目ではあるものの、比較的履修者数も多かった（2020 年度看護学科および言語聴覚学科の入学数：106 名、2020 年度春学期の SLS 履修者数：79 名）。つまり、学内で SLS の受講経験のない学生は非常にわずかであり、同程度の標本数の対照群を設定することが困難であった。このような背景から、対照群を設定する研究デザインではなかったが、今後は他大学と協力するなどして、SLS が社会人基礎力に与える特異的な影響について検証する必要がある。

なお、先述したように、授業開始時点と授業終了時点の調査（授業後）の両方に回答した者は全履修者 1,598 名中 188 名であり、回答率が約 11.8% と低値であった。2020 年春学期は、1 度も対面授業を実施できず、本調査の説明と協力依頼についても、京都先端科学大学の学内専用サイトで文書を掲示する方法を取らざるを得なかった。本研究への参加はあくまでも自由意志であるが、対面授業で説明をすることができていれば、回答率は改善していた可能性がある。今後、SLS における「社会人基礎力」の育成については継続して研究を行うため、対面授業にて研究についての説明が可能となった際の回答率と比較したい。

加えて、本研究では回答者がどの教員のクラスであったのか、ということについて調査できていなかったため、回答者が履修していたクラスの偏りについて明確に示すことはできなかった。第 5 回目から第 10 回目にかけては、スポーツ種目に関係なく全教員が内容を統一して実施する種目共通課題を、第 11 回目以降は同じ種目を担当する教員ごとに内容を統一した種目別課題を実施したが、同時双方向型の遠隔授業であるグループトークの詳細な実施方法については各教員に委ねられていた（テーマについては種目ごとで共通）。回答者があるクラスに偏っていた場合、教員の力量などによる違いが、本研究の結果に少なからず影響を与えた可能性もあることに留意すべきである。そして、今後は選択した種目を調査し、回答者の偏りなども考慮して研究を進める必要がある。

要 約

本研究の目的は、遠隔による大学スポーツ授業を通じて、受講者の「社会人基礎力」がどのように変化するかを明らかにすることであった。著者が所属する京都先

端科学大学のスポーツ実技である SLS（スポーツ・ライフスキル）を受講した 1598 名を対象に、実技授業開始時（授業前）および授業終了時（授業後）において社会人基礎力の変化について調査を実施し、授業前および授業後のアンケートに回答した 188 名を分析対象者とした。「社会人基礎力」は、全対象者の授業前と授業後で比較を行った。

その結果、「働きかけ力」、「課題発見力」、「計画力」、「創造力」、「発信力」および「傾聴力」は、授業後が授業前よりも有意に高値を示した。その他の要素については、いずれも有意差は認められなかった。また、「社会人基礎力」を構成する 3 つの力では、「考え抜く力（シンキング）」について、授業後が授業前よりも有意に高値を示したが、「前に踏み出す力（アクション）」および「チームで働く力（チームワーク）」については、有意差は認められなかった。

これらの結果から、「働きかけ力」、「課題発見力」、「計画力」、「創造力」、「発信力」、「傾聴力」および「考え抜く力（シンキング）」は、遠隔授業で育成可能な要素であることが示唆された。一方、対面授業を実施するからこそ育成できる能力要素が多く存在する可能性も高く、今後はそれらを育成するための授業についての実践研究を進める必要がある。

注 記

- 1) 先行研究では、大学におけるスポーツや運動、演習を通じた教養教育の科目名称について「大学教養体育」、「体育実技」、「大学体育」といった「体育」という言葉を含む様々な表現が散見される。しかしながら、近年「体育」は「スポーツ」へと呼称を置き換える傾向にある。例えば、「体育の日」（スポーツにしたしみ、健康な心身をつちかう）は 2020 年に「スポーツの日」（スポーツを楽しみ、他者を尊重する精神を培うとともに、健康で活力ある社会の実現を願う）へと変更され、「（公財）日本体育協会」は 2018 年に「日本スポーツ協会」へと名称変更された。京都先端科学大学においても、「体育」から「スポーツ」へと呼称の変更および統一がされている。このような背景から、本研究では「大学教養体育」、「体育実技」、「大学体育」を「大学スポーツ授業」という表現に統一している。
- 2) スタートアップゼミで実施された 6 月 11 日～7 月 22 日までの面接授業の内容は、以下のようなものであった。
 - ・オリエンテーション、自己紹介
 - ・新型コロナウイルスに関するプレゼンテーション、振り返り
 - ・各学部学科での成果報告会（オンラインで実施）
 - ・個人面談（授業の内外で実施）
 - ・その他の授業内容については、各クラスの状況に応じて担当教員が柔軟に対応
 - ・新型コロナウイルスに関する全学での成果報告会と振り返り（遠隔と両キャンパスでの展示により実施、対面での質疑応答は実施せず）

対面授業時の人数は、学部学科によって異なり、全ての学部学科の人数を把握することはできなかったが、健康医療学部健康スポーツ学科では1クラスあたり3-4名程度で実施された。

- 3) グループワークは、Web 会議ツール (Zoom, Zoom Video Communications Inc.) を用いた同時双方向型の遠隔授業であり、ランダムに振り分けられた3-4名のグループで、遠隔授業期間中の経験の共有や各種目に関連した課題解決型のテーマについて話し合いを行い、グループとして1つの意見をまとめてプレゼンテーションすることを授業課題としていた。冒頭には自己紹介等のアイスブレイクを設け、ディスカッション中は担当教員が各グループを巡回して適宜アドバイスをすることもあった。なお、堤ほか (2000) は、小グループ学習におけるグループ構成人数は、6人よりも4人においてコミットメントが高く、「人任せにできる」という意識が小さかったことを明らかにしており、本研究におけるグループワークの人数も、適切な範囲内であったと考えられる。

謝 辞

本研究の実施にあたり、三浦重則先生、西政治先生、寺田進志先生には、遠隔授業の実施や受講生へのアンケート依頼など、多大なご協力を賜りました。また、本誌審査員各位からは、多くの貴重なご教示を賜りました。ここに記し謹んで深謝申し上げます。

文 献

- 青木康太郎・粥川道子・杉岡品子 (2012) キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果に関する研究. 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 3: 27-39.
- 有田悦子 (2021) コロナ禍におけるコミュニケーション教育～オンライン会議システムを用いた参加型授業の試み～. 日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会会誌, 19: 6-9.
- 引原有輝・森田啓・若林斉・金田晃一 (2016) 実技種目の異なる大学体育授業が社会人基礎力の育成に及ぼす影響. 大学体育学, 13: 16-25.
- 井上望・川上暁子 (2017) 大学通信制の教員養成課程におけるスクーリングの学習成果: 健康体育科目「ウェルネス」の実践を通して. 武蔵野教育學論集, 2: 99-110.
- 石道峰典・西脇雅人・中村友浩 (2015) 選択科目の体育実技授業を履修する大学生の社会人基礎力の特徴について. 大学体育研究, 37: 1-10.
- 石道峰典・西脇雅人・中村友浩 (2016) 体育実技授業における社会人基礎力育成を意図した介入効果の検証. 大学体育学, 13: 26-34.
- 石原雅彦・高橋仁大 (2010) テニスにおけるオンラインレッスンの指導効果の検討. 日本体育学会第61回大会予稿集, p. 100.
- 糸嶺一郎・高山裕子・山本貴子・松浦利江子・鈴木英子 (2015) 新卒看護師の社会人基礎力に関する尺度の妥当性と信頼性の検討. 日本保健福祉学会誌, 22: 23-32.
- 金田晃一・引原有輝 (2018) 学外活動を伴う集中型の大学体育授業が受講学生の社会人基礎力に及ぼす影響: ゴルフ種目を対象に. 大学体育学, 15: 22-30.
- 片岡隆之・瀬尾誠・高山智行・谷崎隆士 (2015) チョイスゲームを用いた社会人基礎力の効果測定. 近畿大学次世代基盤技術研究所報告, 6: 73-77.
- 経済産業省 (2018) 人生100年時代の社会人基礎力について. https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf (参照日: 2020年9月7日)
- 北島洋子・細田泰子・星和美 (2011) 看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討. 大阪府立大学看護学部紀要, 17: 13-23.
- 成橋和正・松下良・清水栄・山田清文・宮本謙一・木村和子 (2006) VAS法を用いた学生・薬剤師による大学院実務実習・講義の評価. 医療薬学, 32: 931-939.
- 日本緩和医療学会 (online) がん疼痛の薬物療法に関するガイドライン 2010年版2章 背景知識2 痛みの包括的評価. https://www.jspm.ne.jp/guidelines/pain/2010/chapter02/02_02_02.php (参照日: 2021年1月26日)
- 西田順一・橋本公雄 (2009) 初年次学生の社会的スキル改善・向上を意図した大学体育実技の心理社会的有効性. 大学体育学, 6: 91-99.
- 野口和行・須田芳正・村松憲・村山光義・加藤大仁 (2013) 学生の社会的スキル向上を目指した体育実技実践の試み. 体育研究所紀要, 52: 11-20.
- 相良英憲・名和秀起・千堂年昭・五味田裕 (2007) 実務実習モデル・コアカリキュラムの習得・理解度評価の学生による自己評価における Visual Analog Scale 法と5段階評価との比較. 薬學雑誌, 127: 765-772.
- 島本好平・石井源信 (2007) 体育の授業におけるスポーツ経験が大学生のライフスキルに与える影響. スポーツ心理学研究, 34: 1-11.
- 築山泰典・神野賢治・田中忠道 (2008) 大学キャンプ実習が「社会人基礎力」に及ぼす有効性の検討. 福岡大学スポーツ科学研究, 39: 13-26.
- 堤明純・石竹達也・的場恒孝 (2000) 小グループ学習における適切なグループ構成人数. 医学教育, 31: 71-77.
- 渡邊志・松本有二 (2011) 情報スキルの定量的解析における Visual Analog Scale の活用. バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌, 13: 57-62.

(受付: 2021. 5. 10, 受理: 2021. 9. 30)

資料 社会人基礎力に関する調査項目

<設問文>

「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力（12の能力要素）から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な能力」として、経済産業省が2006年に提唱しました。

以下、「社会人基礎力」に関して、皆さんの現時点でのレベルの自己評価を行っていただきます。それぞれの能力について、「全くない」と思うのであれば「0」を、「最高に高い」と思うのであれば、「10」を選択してください。ひとつひとつの質問には深く考え込まず、第一印象を大切にありのままの様子をお答え下さい。

前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	実行力	目的を設定し確実に実行する力
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにし準備する力
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	創造力	新しい価値を生み出す力
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
	状況把握力	自分の周囲の人々や物事との関係性を理解する力
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力

Research Note



Japanese Journal of Physical Education and Sport for Higher Education
©2022 Japanese Association of University Physical Education and Sport

Change in the fundamental competencies for working persons after remote physical education classes in college students during the COVID-19 pandemic

Kei MAEDA¹, Futa SUZUKI¹, Fumio TSUKAHARA², Miki NARIAI¹,
Yasuko YOSHINAKA¹, Yuya MATSUKI², and Tetsuji IKEGAWA²

¹Kyoto University of Advanced Science, Educational Development Center

²Kyoto University of Advanced Science, Faculty of Health and Medical Sciences

Abstract

<Purpose> The purpose of this study was to clarify the effect of remote physical education classes in college students with regards to the “Fundamental Competencies for Working Persons” initiative developed by Ministry of Economy, Trade and Industry (METI), during the COVID-19 pandemic. Physical education classes in college students of this study which is called SLS (Sports Life Skills) aim to improve the “Fundamental Competencies for Working Persons”. <Methods> Due to the influence of COVID-19, we asked students attending online physical education classes to self-evaluate 12 ability parameters about their own “Fundamental Competencies for Working Persons” by using questionnaires conducted at the 5th (Pre-test: the start of practical class) and 15th (Post-test: the end of practical class) classes. The subjects in this study were 188 (1st year undergraduate students: 123, 2nd year undergraduate students: 65, male: 120, Female: 65, unanswered: 3) out of 1598 students attending the online physical education classes, and who responded to both questionnaires. Wilcoxon signed-rank test was used to compare each value in Pre-test to in Post-test. <Results and discussion> The main results in this study are as follows. In the 12 competency factors, “Ability to influence” ($z = -2.26, p < 0.05$), “Ability to detect issues” ($z = -2.48, p < 0.05$), “Planning skill” ($z = -2.62, p < 0.01$), “Creativity” ($z = -3.99, p < 0.01$), “Ability to deliver message” ($z = -3.95, p < 0.01$), and “Ability to listen closely and carefully” ($z = -2.49, p < 0.05$) were significantly higher in Post-test than in Pre-test. In the three competencies, only “Ability to think through (thinking)” ($z = -3.85, p < 0.01$) and “Ability to work in a team (teamwork)” ($z = -2.25, p < 0.05$) were significantly higher in Post-test than in Pre-test. It is suggested that “Ability to influence”, “Ability to detect issues”, “Planning skill”, “Creativity”, “Ability to deliver message”, and “Ability to listen closely and carefully” can be improved through online physical education classes. These results showed the effectiveness of remote physical education classes in improving 12 competency factors for the “Fundamental Competencies for Working Persons”. The results of this study could contribute to effective remote physical education classes during and even after the COVID-19 pandemic. On the other hand, these results suggest the possibility for improvement in many of the competency factors through live (face-to face) physical education classes. Therefore, further research which will focus on how to improve those competencies will be necessary in the future.

Keywords

life skills, ability to think through, ability to influence, ability to deliver message, ability to listen closely and carefully

Corresponding author: Kei MAEDA Email: maeda.kei@kuas.ac.jp